

# 太平洋戦争前後における タイ表象イメージの変容と接合

クボタ ユウコ  
久保田 裕子

## 一. はじめに—文学テキストに刻み込まれた〈場所〉をめぐる記憶

〈記憶〉は時間だけではなく、場所と共に想起され、場所の景観と身体の〈記憶〉は一体となっている。明治期以後の日本において、小説・新聞記事・学術論文・児童向け読み物・教科書などの文字テキストの他、写真・絵画などの視覚メディアを通して、タイの土地と人はさまざまなイメージと共に描かれてきた。日タイ攻守同盟（1941年）締結前後、日本国内においてタイへの興味関心がにわかに高まった昭和10年代に、「大東亜共栄圏」下にタイを描いた多くのテキストが生産・消費されたが、タイに向けられたまなざしは、帝国主義的な領土拡張の欲望と密接に関わっていた。また1941年のアジア・太平洋戦争の開戦と両国の同盟関係の締結がほぼ同時に行われたことは、両国の関係に複雑な陰影をもたらした。しかし植民地化された東アジア地域とは異なり、タイは政治・経済的な関係が比較的希薄であり、従来の植民地文学研究においてタイが対象化されることが少なかった。

そして1960年代以降の日本のタイへの経済進出によって、タイとのいわば〈出会い直し〉が行われた。そこでは過去の〈記憶〉が継承されたのか、あるいはタイという場所をめぐる物語が新たに創出されたのか。1960年代以降の経済的再進出の過程で表象されたタイをめぐるイメージの中の、〈記憶〉の変容と接合をめぐる問題系が生じてくる。

アジア・太平洋戦争前後に流通したさまざまなテキストの中に立ち現れるタイ表象は、国際関係をめぐる歴史的な文脈が背景にあり、政治的・社会制度と往

還しつつ構築された。そして戦後から現在に至るまで、出版ジャーナリズムの隆盛の中で、映画・写真などの視覚メディアとも連動しつつ生産され、受容されてきた。このようにタイという〈場所〉をめぐる同時代言説は、小説というメディアにも影響を与えてきた。その影響・受容の過程を確認するためのひとつの方法として、タイ在住の日本人によって書かれた「泰国日本人会会報」[クルンテープ]（泰国日本人会発行）などの証言を通して、タイをめぐる〈記憶〉が創り出され、変容していく断面を切り取ってみたい。しかしそれは、〈誤った〉イメージを訂正し、〈正しい〉タイの姿を実体化してみせることではない。事後的に再構成された〈記憶〉のありようは、現在そのものの反映であり、私たちが現在、受容し、引用し、再生産しているさまざまなタイをめぐるイメージが、どのような〈記憶〉から継承され、あるいは切断された中で生成されたのか。その生成と消長の運動の一端をたどるのが本論の目的である。

タイという土地と人を現在の日本から見たとき、観光地としてのエキゾチックなイメージを提供する場所であり、あるいは日本企業の市場であると同時にアジアにおける工業生産の重要拠点のひとつといった関係性が浮かぶ。1960年代以降の日本近代文学においても、日本とタイの〈出会い直し〉の中で、新たに結ばれた関係性が反映された代表的なテキストとして、三島由紀夫の『豊饒の海』4部作（1969～1971）の『暁の寺』の他、宮本輝『愉楽の園』（1989）、池澤夏樹『タマリンドの木』（1991）などが挙げられる。その他にも、日本側の一方的な、エロティックな身体表現を伴う没入と解放が臆面もなく描かれた小説、旅行記、新聞・雑誌記事などのテキストにおいて、あるいは映画などの視覚メディアにおいてもタイをめぐるイメージが生産・消費されているという現状がある。このような現象について、経済格差を背景とした一種の新植民地主義の表れとして位置付けることもできるだろう。しかしおびただしいテキストは、タイをめぐるどのような〈記憶〉を起源としているのか。

## 二. 〈記憶〉をめぐる言説

1990年代の〈記憶〉をめぐる言説の隆盛は、アジア・太平洋戦争や国民国家に対する批判という文脈で語られた。『創られた伝統』<sup>①</sup>、『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』<sup>②</sup>などの近代国民国家の虚構性を明らかにする論がその理論的背景にあったと考えられる。また谷川稔『『記憶の場』の彼方に日本語版序文にかえて』<sup>③</sup>においては、日本における〈記憶〉概念の理解について、これらの議論が背景にあったことを指摘し、「伝統それ自体よりも、伝統がどんな風に創出され、いかに変容し、あるいは死滅するか」という「記憶の歴史学」について言及している。〈記憶〉がいかに表象され、神話化されて読み替え・読み直しが行われたかという問題編制は、〈記憶〉がどのように叙述されたかという視点につながる。

また成田龍一は〈記憶〉化について、「体験／証言を再検証し、「他者」との関係性のもとに戦争とその語りを探る営み」<sup>④</sup>であると述べている。「戦後史（冷戦体制）を組み込んだアジア・太平洋戦争の叙述—「戦後」がつくりあげた認識と、「戦後」が消去した意識とを自覚し、双方をふまえたアジア・太平洋戦争の考察と戦争像の提示が図られている」<sup>⑤</sup>という成田の言葉は、歴史における「語り方」と「文脈」の問い直しを問題化している。これらの言葉を受けてタイを描いたテキストに目を向けたとき、現在のタイをめぐる表象に影響を与えた〈記憶〉のありようが問題化される。

神谷忠孝は1984年の段階において、「方法としての東南アジア・序説」<sup>⑥</sup>の中で、「もっと巨視的に、日本にとって東南アジアとは何か、逆に、東南アジアにとって日本とは何かという観点も必要になってくる」と指摘している。このような見解は、高度経済成長を経て、バブル経済の前夜にあった時代であって、日本の経済進出が「日本政府、企業の東南アジア観は、明治のはじめにおこった「南進」の思想と同じであることを痛感した。」<sup>⑦</sup>という実感から発せられた見解であり、神谷は明治時代と戦後の東南アジア観の共通性を強調している。この言葉は、グローバル化と共に日タイ関係がより緊密化した現在の状況

とも無縁ではない。

〈記憶〉をめぐる表現は、現在と重ね合わされた、いわば〈記憶〉とそれを再構成する現在という二重化された時間が析出されたものである。テキストの語られ方の系譜をたどりながら今の位相を明らかにすること、言い換えれば歴史的考察を参照しつついまの構造を解明することは、文学テキストにあらわれたイメージを実体的な〈記憶〉の証言によって〈本当〉の姿に修正することではない。本論では、〈記憶〉がいかに関承し、断絶されたかという、テキストの中のイメージの変容を複数のテキストを概説的に横断しつつ考察し、日本文学テキストと同時代言説の中の過去の歴史の接合と断絶、〈記憶〉のありようをたどり直してみたい。

### 三. 戦後の日タイ関係における〈出会い直し〉

#### (1) 駐在員という主体

アジア・太平洋戦争の後にタイを訪れるようになったのは、日本企業の駐在員たちであった。高見順は1955年に、エッセイ「タイの井池」<sup>⑧</sup>において、「(バンコック学士会名簿の一引用者注) 勤務先が出てみて、それを見ると、どういふ商社がこの方面に進出してゐるかが分つて便利だつた」と述べているが、1955年には既に日本企業のタイ進出が行われていたことがうかがえる。さらに「(バンコック市内で一引用者注) 日本の商社員が一軒づつシラミ潰しに訪ねて、売り込みをするのだといふ。」<sup>⑨</sup>と感慨深げに記している。商社員たちの猛烈な仕事ぶりが賞賛を込めて伝えられているが、1953年にはタイで日本人会が再開され、1954年には商工会議所が設立された。「その過程をリードしたのは、日本から派遣された大企業のトップエリート社員で、彼らの多くは戦前・戦中との連続性がないものが多かった。」<sup>⑩</sup>という指摘がある。しかし彼等を支えたのは、「戦前・戦中來現地にいて戦後引揚げ、そして再度現地に戻った「下町族」の日本人だった。彼らが下支えをしたという意味では、戦前・戦中・戦後の人的連続性をここに認めることができる。」<sup>⑪</sup>という。このように戦

後に再進出した在タイ日本人の内訳として、企業から派遣されたエリート駐在員の影に、彼等を支えたタイに長年住み続けた人々がいた。また戦中・戦後の継続性について、次のような指摘がある。

終戦直後、アメリカ占領軍の下で解体された旧財閥（略）は1950年代半ばまでに復活再編を終え、また1950年代前半からは次々と東南アジアに拠点を作り上げていった（略）戦後の日本のタイ進出はいわば戦前の進出パターンをなぞる形で当初、再開された<sup>12</sup>。

先に高見が証言していた通り、1950年代には既に日系企業はタイで活動を始めていた。このような活動は、一方で日系企業及び日本に対する批判的な見解が生まれる契機となった。そのようなまなごしを肌で敏感に感じ取っていた在タイの人々の証言を拾ってみると、例えば1971年2月の「編集後記」（「クルンテープ」1971.2）には、次のような証言がある。

対日貿易は莫大な入超であるばかりでなく日本企業はタイ国の凡ゆる方面に進出してタイの経済を支配している。又、日本人の観光客は多いが、彼等は凡て日本の飛行機に乗り、日本のホテルや料理屋を利用するのみで何らタイに益する処がない<sup>13</sup>。

泰国日本人会によって1968年1月に創刊（月1回発行）された「クルンテープ」という雑誌は、主に日系企業の駐在員を読者対象とした雑誌であり、内容も男性ジェンダー中心のであった。また当時、タイ国内の政治的な問題を伝えることについては制限されていた<sup>14</sup>。そのため雑誌の内容はタイの歴史・文化紹介や旅行記が多く、短期滞在の駐在員を読者層としていたことをうかがわせる。一方で「メナム句会」といった創作欄も連載され、会員を中心とした文学サークルがあったことがわかる。また読者の希望する記事内容が「我々の企業進出に関連した問題点の追求に関係しております。」というように企業のタイ進出に関わる情報であったことをうかがわせる。「在タイ日本人を分類すれば、六割がビジネスマン、三割がその家族、残りが官公庁やサービス業」であり、1970年の時点では、タイ在住日本人の渡航理由が限定されていた。

しかしその中でも、経済的に豊かな生活を送っていた駐在員の妻の抱える孤独は、「『マダム』は相変らず一人ぼっち」<sup>15</sup>という記事の眩きとして記されている。日本から隔離され、現地の生活となじむこともなく宙づりのまま暮らす女性の孤独と倦怠は、後述する『愉楽の園』にも登場する。また加藤仁の小説「チェンマイの驟雨」<sup>16</sup>（『問題小説』1992.8）には、日本の有名メーカーの技術者が、世界各地を放浪した末、バンコクで暮らす状況を「シャムゆきさん」と名付けている。「バブル崩壊後、数多くのサラリーマンを取材」（「あとがき」）したという作者の言葉の通り、タイで暮らす人々の背景は多様化した。かつてのエリート駐在員だけではない、さまざまな立場の人々の生活が浮かび上がってくる。

## (2) 戦争の痕跡

戦争の痕跡は戦後にも残存し続けた。臼井吉見は1962年に東南アジアを訪れ、戦前と戦後のつながりについて言及している。臼井はアジア財団による東南アジア・中近東旅行（1962年2月15日～4月16日）の旅行記「むくどり通信 タイ」<sup>17</sup>の中で、次のように述懐している。

郷里の補充隊にいたので、次々と送り出した部隊や仲間は、おもに東南アジアに向い、多くは、そのまま、帰らなかった。（略）そんなわけで、東南アジアの一部なり、チラッとでも、見とどけないことには気のすまない、負い目に似た思いがあったのだ。

旅行記の深層には、戦争中の郷里の友の死と、死者への「負い目に似た思い」があった。一方で1954年に発表された『戦後経済十年史』<sup>18</sup>の「編者の序」（（前）通商産業省大臣官房調査課長 通商産業省重工業局鉄鋼業務課長）によれば、「この10年間の日本経済の発展は、アメリカの援助と特需によつてその脅威をとりぞくことができたからこそはじめて可能であつた」<sup>19</sup>という時代を経て、日本の復興は進んでいた。しかし臼井がタイに渡った1960年代前半においても、未だに癒えていない戦争の遺した傷が、過去の〈記憶〉を語

る現在の意識にも影響を及ぼしていたことがうかがえる。このように1960年代の同時代テキストには、戦争の時代を語りの現在の位置から見直し、過去と現在を接合させようとする証言が見いだせる。

例えば元在バンコック・タイ日本協会理事であった星田晋五は、「泰国日本人会創立五十周年会報記念号」（泰国日本人会発行、1963.9）に「バンコック二十年前のこぼれ話」という回想記を掲載している。「（昭和13年当時）タイの空気は、内心、日本を注視しながら露骨に近づかず、英仏は気がねするかに見えたり、また、日本が果してどれだけ出来るかと笑っている様にも思えた。」と述懐している。このような証言も、過去の記憶の想起であると同時に、1960年代における語りの現在の状況の中で再編成されたとも考えられる。同様に1968年に刊行された清水寥人の『小説泰緬鉄道』<sup>20</sup>の「あとがき」では、「汚名をきたままで、密林の中に眠る多くの同胞」「連合軍の捕虜たち」「現地人労務者」それぞれへの鎮魂の思いを吐露し、「自分の青春の墓標を、この小説の中にうちたてねばならぬと決意した」と述べている。また後述する『暁の寺』に内在する戦前・戦後の二つの時間の接合においても、戦後の意識が過去の叙述に影響を与えた可能性がある。このような戦後の時点から振り返った戦時中の記憶は、語りの現在である戦後の意識によって、ある部分が捨象され、再構成された可能性がある。言い換えれば、現在の意識の中に戦争中の過去の記憶が残留し、影響を与え続けている状態であると言ってもよい。このような戦争一戦後の継続的意識は、1980年代のタイ在住日本人の証言においても見出すことができる。

「クルンテープ」（「タイ国日本人会70周年記念特別号」1984.3）には、三井OSK勤務で1973年5月～1975年3月まで編集委員長であった重松景二の「私とクルンテープ誌」という次のような証言が掲載されている。

終戦・復員によって戦後の混乱の中に社会人の第一歩を踏み出した者にとって、現在までの生活は無我夢中の阿修羅の如き新しい戦場でした。

（略）戦場に消えていった兵士が抱いていた一冊の文庫本のようなもので

ありたいと願いました。

さらに重松は長く編集に携わった「クルンテープ」誌への思いを語り、雑誌の中に「私のバンコク」があります。」と述懐している。戦争の直接体験者が戦後の状況を戦争のメタファーで語ることによって、戦争の〈記憶〉を戦後へと接合させようとする意識が見られる。

1960年代から80年代頃に展開された戦中・戦後を接続する言説の一方で、高度経済成長とアジアへの再進出が生み出した新たな表白も登場した。開高健『フィッシュ・オン』<sup>21</sup>では、日本社会の現実から逃亡し、離脱するためにタイという土地が選択されている。そこにあるのは現実の日本への違和感とそこからの逃走の欲望である。タイで働く真珠技術者の若者の、「いい玉さえできたら商売や契約のことも忘れてしもうて、いっしんにうちこみとうなる。それがわれわれの良心」<sup>22</sup>という働く者の言葉に共感しつつ、「日本の業者そのものがヌラヌラといいかげんなやつらで嘘ばかりついていっこう契約を実行しようとしな」というタイ側の「嘲りと憎しみ」に満ちた言葉の前に、開高は「まるで私が罵られているような気がしてきて、はずかしさに、いたたまれな」思いを抱く。

また曾野綾子の「日の下の労苦」<sup>23</sup>には、「安泰を絵に描いたような」駐在員夫婦が、ニューヨーク支店勤務からタイ駐在になってからの姿が描かれている。かつて参戦した人々と同様に、社命に従った駐在員たちも自ら選んでタイに来たわけではなく、それが「彼の上に私が初めて見つけた、耐えている大人の表情」につながっている。しかしアジア・太平洋戦争の記憶を伝える「例の戦争中の泰緬鉄道」も彼等にとっては観光地のひとつに過ぎず、タイ人メイドの運ぶコカコーラを飲み、アメリカ的近代生活に執着している。タイの土地と人には興味を持たない駐在員夫婦であるが、息子の春生はタイ語も堪能で、「この生活を自分のもの」にしてタイの生活になじんで暮らしていて、異文化への向き合い方が異なる親子が描かれている。

以上のように1950年代後半から1980年代までの、タイに住む日本人の状況



を映し出したテキストを概観してみると、当然のことながら個々の言説には共通性と差異があることがわかる。戦前に既に構築されていたイメージが継承され、現在の状況の中に戦争の痕跡を見出す視点を通して描かれたテキストもあり、一方で新たな向き合い方を描いたテキストもあった。そして駐在員たちがタイを訪れた後に登場したのが、日本人観光客の群れであった。

### (3) 観光地としてのタイ

末廣昭は盤谷日本人商工会議所刊行の「日本・タイ交流史—モノ・カネから人的交流へ（1973年～2003年）」<sup>24</sup>において、タイ経済における「外貨獲得源としての「観光産業」」の重要性について指摘している。「観光旅行の視線が社会的歴史的状況の中で形成され、その結果どのような観光体験が成立したのか」<sup>25</sup>という新たな問題系が登場したことになる。日本側から言えば、タイを訪れることで、観光の中で見る主体としての自己形成が行われていった。ここでは昭和10年代のように、〈外地〉を傘下に修める大国といった意識は希薄であったが、むしろ無意識なたちで見る側の権力性が内在していたと言える。再び「クルンテープ」を参照すると、過去のような歴史意識は希薄であり、むしろ観光客、消費者として主体形成をしていると言える。かつては帝国の発展と一体化することによって、見る主体が構成されたが、ある意味で高度経済成長後の経済発展が再びそれを可能にしたと言える。そこではタイの土地と人々への関心は希薄であり、他者として外側から眺めるという位置が確保されていた。

そのような日本とタイとの関係性のありようを描いたテキストとして、三島由紀夫『暁の寺』（『新潮』1968.9～1970.4）が挙げられる。『暁の寺』の構造と本多繁邦のまなぎしのありようを通して、タイを描いたその後のさまざまな小説で展開されていく原型的なモデルが出揃っていると言える。第一部（1941年のバンコク）、第二部（1952年の日本）を通して、戦前・戦後に渡る二重化された時間軸の構成になっている。本作は本多に象徴される日本の近代が〈南

洋〉に出会ったときの出会いのかたちを切り取ったテキストとして、さらにそのような意識が語りの現在である1960年代において再構成されたテキストとして読むことができる。実際に三島は『暁の寺』取材のために1965年、67年の二度タイを訪れていて、「クルンテープ」に寄稿していた在タイ日本人に取材協力を受けていた<sup>26</sup>。このようなテキストの成立から見ても、本多の1941年のタイ渡航体験も、1960年代当時の言説によって遡及的に再構築されたと考えられる。

『暁の寺』における本多のタイ滞在は、現地の人々から隔離され、飯沼勲の転生者であるジャントラパー姫以外、タイ人とは殆ど交渉は持たない。五井物産によって周到に準備された「大名旅行」で、本多はイギリス人のまなざしの前には射すくめられて萎縮するが、一方でタイ人に対しては、無関心であることによって、その鈍感さを示唆している。観光する主体、審美的に対象を消費する旅行者の「観光のまなざし」<sup>27</sup>が展開している。このようにテキストでは日本・タイ・イギリスの視線の交錯と切断を通し、日本を軸としたアジアと西欧との関係性が見いだせる。

部屋から下りてきた本多は、改めて、自分もそれに属する「南方外地の日本人の紳士連」の、人もなげな一団の素振をつらつら見た。彼らはいかにも美しさを欠いてゐた。

何故だらう。本多はこの瞬間、はじめて彼らの醜さを、自分自身の醜さと共に、如実に発見した、と云ふほうが当ててゐる。これがあの美しかつた清顕や勲と同じ日本人とはとても思はれない<sup>28</sup>。

ここでは眼前の現実を否定する虚構としての〈日本〉が立ち上げられ、同時にすべてを凌駕する普遍的装置としての「生まれ変り」が設定され、西欧のまなざしの前で傷付けられた本多の自意識は回復する。

1952年にジャントラパー姫は留学のために来日するが、美しく成長した彼女を前にして、本多は「花卉の肉の厚いシャム薔薇を神秘化する作業」に熱中し、審美的エキゾチズムの対象とする。ところが彼女は自分自身を「鏡のやう

な子供」であったと述べ、勲の生まれ変わりと信じるのは本多の認識であることをほのめかしている。「鏡」としてのジン・ジャンを通して、本多は日本の独自性と同時に普遍性という両面を確認する自己の鏡像を見出している。同時に本多がタイ在住の日本人菱川に苛立つのは、五井物産に経済的にたかっている菱川の中に、財閥に囲い込まれた自分自身の姿を見出したからではないか。

さらに本多は、占領軍の愛人を持つ慶子の甥であり、アメリカかぶれの志村克己にジン・ジャンを誘惑させた後で自分が犯すという計画を立てる。ここには1960年代の、日本の東南アジア進出と経済発展の背後にあるアメリカの影を見出すことができる。戦後の日タイ関係を総括した末廣昭の「日本・タイ経済交流史—30年の歩み」<sup>29</sup>は、「アメリカの主導の下で日本は東南アジア諸国とより緊密な関係をもつ」という戦後日本と東南アジア諸国との関係の枠組について指摘している。したがって本多の試みたジン・ジャンに対するグロテスクな行為は、日本—アメリカ—アジアをめぐる関係性の隠喩となっている。しかし『暁の寺』の中では内面描写がなく、言葉を付与されていないジン・ジャンは、本多が贈った指輪を無言で投げ捨てて、その他者性を見せつける。ジン・ジャンの徹底的な拒否を通して、性的に収奪しようと目論見ながら失敗し、相手（アジア）に自分が嫌われていることに気付かない本多（日本）の戯画化が行われている。言わば植民地宗主国の男性側の世界観が現地女性の視点・立場から拒絶されるさまが提示され、理想の投影と拒絶のドラマが展開している。ここには植民地ロマンスの書き換え、言い換えれば、タイを審美的・性的対象として囲い込む試みとその挫折が、テキストの中で戯画化されて再現されている。本多を通して、西欧の植民地主義を内面化した非白人知識人男性の欲望と苦悩が描かれているが、自己（男性）批判はなされずに他者（女性）からの拒絶が描かれている。

勲の死ほど、純粋な日本とは何だらうといふ省察を、本多に強ひたものはなかつた。（中略）タイのやうな国へ来てみると、祖国の文物の清らかさ、簡素、単純、川底の小石さへ数へられる川水の澄みやかさ、神道の儀式の

清明などは、いよいよ本多の目に明らかになった<sup>30</sup>。

ここでも本多を通して、自国文化の優位性の確認がタイとの比較を通して立ち上げられている。彼はタイを見ている、実際のところ自己の転生物語しか関心がなく、異文化や風俗に対して好奇心を持つこともない。他郷を見ながら、そこに自分自身の鏡像を見ている。そのような本多のありようが、ジン・ジャンによって完膚なきまでに否定されるという一連のドラマが、テキストの中で描かれている。『歴史で考える』<sup>31</sup>において、キャロル・グラックは次のように述べている。

アメリカと同じように、日本も、主に比較することを通じて、国民的アイデンティティを創出したのである。例外主義へと至る道筋はさまざまであろうが、日本もアメリカも、他国の歴史を関係ないものとして無視することによってではなく、むしろ詳細に検討しそして捨てさることによって、自国の歴史の比類のなさを見出した。

本多の考える〈日本〉はタイとの比較の相の下に立ち上げられ、タイ・インドを巡る旅行には国家意識が内在していた。観光という行為自体が、比較の視点を通して差異を作り出し、確認し、消費する行為であると言える。『暁の寺』は、ツーリズムを通して、他者を審美化すると同時に〈日本〉の立ち上げを図ろうという試みが描かれている。

#### (4) バックパッカーの批評性

日本の経済力の上昇は、タイを訪れる新たなタイプの観光客を誕生させた。先に述べた〈駐在員小説〉は、日本の高度経済成長を支えた人々を描いているが、アジアを放浪するバックパッカーたちは、日本の競争社会の批判者として登場した。例えば谷恒生の『バンコク楽宮ホテル』（講談社、1981.11）では、タイは異国情緒と性的冒険をかなえる非日常の場所として描かれている。アジアのエキゾシズムの表象として、1980年代以降、大量に模倣・消費されるようになる猥雑な旅行印象記のひとつであるが、このテキストにおいても戦後と

いう意識が刻印されている。

戦後間もない頃、日本の子供たちも進駐軍ジープでくばる食物を、食べ方もわからず、ただがむしゃらに頬張っていたのだろう。私にも、かすかだが記憶がある。(略) タイは日本のあの頃と同じなのかもしれない。

ここでは日本の過去とアジアを同一化する戦後の〈記憶〉が語られている。「楽宮にたむろするパンパン」といった表現からも、戦後の日本とタイの現在を重ね合わせる意識がうかがえる。また「半端なボランティア志願者が続々バンコクへ詰めかけるようになった」という一節は、タイ国境地帯のカンボジア難民キャンプにおける人道活動について、皮肉を込めて描いている。後述する『タマリンドの木』にも登場する、ボランティア活動などの人道支援をアジアの国々で行う日本人の姿が戯画化されている。しかし『バンコク楽宮ホテル』に登場する人物は、主に日本人男性とタイ人女性であり、女性を性的対象として見る表象は、他者の囲い込みと占有化のバリエーションと言える。また「日本からタイを見るのではなく、タイという国の地面に立って、極東の貪婪な経済大国を観察してやろうと心がけています。」「高慢づらで闊歩している日本人観光客」といったような表現は、どのような立場から発せられたのか、発言者の立つ位置を逆照射せずにはおかない。しかし日本の現実への嫌悪と批判という論理構造を取り上げたとき、開高健の『フィッシュ・オン』、また次に挙げる立松和平の『熱帯雨林』(新潮社、1983・7)ともある共通性を見せる。言い換えればタイが表象化される時、〈純文学〉と〈大衆文学〉といったカテゴリーを越えた同一の構造を持っていることに気付く。

自分の国にじっとしていられず、何をしたいのかもわからず方途もないまま歩きまわっている、惨めな貧しい獣なのだよ、と過剰な陽光の下で花のように清澄な少女たちに向かって叫びたい衝動を、峰夫は堪えていた。

(立松和平『熱帯雨林』)<sup>32</sup>

バックパッカーの彼等は高度経済成長のもたらした競争的社会からの脱落者であり、制度から逃走することで批判者になり得た。一方で彼等の彷徨は日本

の経済力が可能にした海外旅行である点で、自分では無自覚うちに制度内存在として回収されてしまう。

バックパッカーたちに大きな影響を与えた沢木耕太郎の『深夜特急 第一便』（新潮社、1986.5）は、そのような矛盾について、アジアの側からの批判のまなざし通して明確にとらえている。

しかし、仕事でもなく、勉強でもなく、ただほっつき歩くためだけに異国に来ている若僧が、俺には金がないなどという台詞を吐いたら、それはずいぶんいい気なものではないか、と思われても仕方のないことだったのだ。私はそんな簡単なことに考えが及ばなかった。まして、その国で必死に働いている同じ年頃の若者にとっては、ふざけるなのひとつくらい言ってみたい台詞だったろう。私は自分が金がないということ売り物にして旅をしてきた卑しい存在のように思えてきた。

沢木はタイに進出した日系企業について、「日本の企業はひどい。ダムを造れば日本の資材と技師で作ってしまうし、工場を作れば組立て工場ばかり」であり、「日本人は吸い上げることしか考えない」<sup>33</sup>という現地の人々の批判の言葉を伝えているが、一方で日本の経済力が自分自身の旅を下支えしているという認識を持っている。いずれにしても現在の時点から、「異国を目的もなくほっつき歩いている若者の熱狂と退廃の果ての危うい姿」（『旅する力—深夜特急ノート—』新潮社、2008.11）として総括された旅行記にリアリティと多くの読者の共感をもたらしたのは、経済力の向上により、かつては政府関係者、国際的大企業の駐在員及びその家族という、特定の人々しか許容されなかった海外渡航の可能性が、一般の人々にも開かれていったという事情が背景にあった。

海外渡航の大衆化という問題について、「クルンテープ」の1969年10月号を参照すると、「会長メッセージ」（山本一）として、「おごるな日本人」という新聞記事が紹介されている。「日本の駐在商社員や観光客の傍若無人な遊びぶりと荒っぽい金使いが現地の人々のマユをひそめさせていた」ことを憂慮し、「私共は東南アジアの一角に進出した日本経済最前線の戦士」という宣言がな

されているが、このような気負いに満ちた言葉は観光の大衆化を慨嘆するエリート駐在員の意識を反映している。一方で1987年に過去30年の日タイ関係の歴史を回顧した『タイ経済社会の歩みとともに―盤谷日本人商工会議所30年史―』盤谷日本人商工会議所発行、1987.3)の「観光広報産業部会 タイにおける各業界の歩み(11)観光 5 ナイトスポット」の項目には、「タイの観光を論ずる時、これを除外するのは片手落ちである。ごく大雑把に概括しておきたい」という記事が見られる。「観光」の記述の中で、ほとんど全てのスペースをさいて「ナイトスポット」について言及していて、タイ観光に性的なサービスを求めてきた日本人の姿が浮かび上がってくる。

例えば「クルンテープ」は先に述べたように駐在員向け雑誌として登場したが、1970年6月号には、「バンコク通人心得帳」「夜の案内記」として、「(1)女性を特定化せぬこと(2)重役ポーズは高くつく(3)奥様とナイトクラブへ(4)女中にさわるな(5)来泰者御接待コース」(今村久米夫(Kライン))という記事が見られる。このような記事は雑誌の男性ジェンダー的性格を反映し、日本の本社から来た「来泰者御接待」をしなければならなかった男性読者への情報提供となっている。タイに在住しながら観光のまなざしのもと、相手国を性的に収奪するという姿勢は、当然のことながらさまざまな批判を生み出した。

1970年当時の日タイ関係について、市川健二郎(東京水産大学助教授・前チュラロンコン大学日本語研究講座客員教授)は、「タイにおける日本人社会の考察」(「クルンテープ」1970.12)という記事の中で、「タイ国を含むアジア・ナショナリズム」が隆盛し、「日本の新植民地主義反対を叫ぶ声」が高まっている事情について解説している。すなわち「在タイ人は大使館、泰国日本人会、日本人商工会議所、会社関係の集会、文化・スポーツ団体を通じて独自の日本人社会を形成して来た」が、彼等の多くは「合弁会社の経営と技術の指導者」であり、「彼等は短期間の滞在後、帰国するからその目は常に東京本社に向いており、タイ人社会への順応に向かっていない。」このようにタイ社会と遮断された生活について、「クルンテープ」(1977.5)の報道特派員を囲んだ

座談会においては、「日本人の実体はなにか、大量進出の意図はなにか、について警戒の念」や「日系企業に働くタイ人からの日本批判」<sup>34</sup>がなされるなど、外部からの厳しいまなざしが注がれ、1972年の排日運動につながっていったと分析されている。それはタイ在住日本人にとって切実な問題であり、「われわれの行動如何によっては何時厳しい批判が加えられるかも知れません」<sup>35</sup>といった自戒の言葉が繰り返し「クルンテープ」誌上にも登場する。どのように相手の目に映るかということ意識しているが、言い換えれば他者という鏡に映った自己像そのものが重要視されていたことになる。

このように明確な指命を持って公務員や企業から派遣された駐在員たちに比べたとき、目的を持たない若者たちが見た旅の驚きの吐露が際立ってくる。角田光代の「はつ恋 プーケット」<sup>36</sup>という旅行記では、「そのタイ旅行で、私は打ちのめされたのである。異国というものに文字通り魅せられた」という10年以上前の1991年の旅の記憶が記されている。

そのときのタイは、きれいなものも汚れたものも全部ひっくるめて、私の求めるリアルそのものだと思ったのだ。思えば、私はリアルと遠く隔てられて育った。道に放置された動物の死骸を見たことはなく、口にする豚肉が血を流すことも知らず（略）真綿でくるまれたような世界しか見てこなかったと、二十三歳の私は強く思ったのだった<sup>37</sup>。

このエッセイでは、異文化への驚きが単なるオリエンタリズムに回収されるのではなく、10年以上経過して訪れた2000年代のタイの急激な近代化がもたらした、都市化されたタイ社会の変容も見て取っている。

何か世界観みたいなのが大きく変わる、揺らぐ、それを全身で理解するということは、おそらく七〇年代以降、あり得ないというのが私の意見である。だから、たまたま旅行したことによって魅せられた場所の、そのリアルな変化を目撃できるというのは、本当に幸せなことだと思うのだ。

ここでは「変化と、けれど何があっても変わらぬ確固とした核。これがきつとタイの姿なのである。」という認識を通して、時間の経過と共に社会が豊か



になり様変わりしつつあった1990年代以後も、根本的な核を持ち続けるタイの姿が描かれている。

### (5) 神秘体験とオリエンタリズム

以上のようにタイに在住し、あるいは旅をする日本人の描くテキストを概観してきた。そこでは他者の占有化という姿勢の一方で、タイという異質な視座を通して、日本社会を批判する立ち位置が担保されていた。しかしそのような視線も、タイ社会の実情を見るというよりも、自らの内面を掘り下げる内向きなものに傾斜しがちであったことは見てきた通りである。さらに1990年代以後、タイに対して、より精神的な超越性を仮託しようとする見方を反映した小説群が登場する。

ここ、バンコクはクルンテープ—天使の都と呼ばれています。あなたが見たもの、きっと悪いものじゃない。辛い事、悲しい事を抱えた人のところに、天使がやってきます……その人に幸せになってもらいたくて<sup>38</sup>

ここでは一人娘を亡くした夫婦の再生を助けるタイ人が登場する。神秘的な力で日本人を救済するタイ人という物語を通して、精神的な癒しと救済、再生をタイに求める姿勢は、村上春樹の「タイランド」(『新潮』1999・11)にも批評性を以て描かれている。しかし一方的な愛情や献身を相手に求める姿勢は、より無意識的な相手の自発的従属を期待することにつながる。さらに国家間の経済的力学における問題を回避することで、新たな植民地言説の内側に収まってしまう。一種の美談として描かれる癒しの物語は、無意識的であるがゆえに、問題はより根深い。オリエンタル・ホテルを舞台としたポストコロニアル空間は、ファンタジー的な意匠を通して、歴史のない快樂・救済の場所として演出されている。両国の歴史をめぐる〈記憶〉とは切断された自己閉塞した風景であり、ここに快適なツーリズムという現代の日本社会に見られる東南アジア表象のひとつのありようがある。

津島佑子は2003年に「レイプのうわさ話」<sup>39</sup>(『21世紀 文学の創造5 境

域の文学』2003.3)において、このような表象のかたちを次のように批判している。

けれど日本の側でも、「異境」に対する態度は共通している。東南アジアの国々を舞台に、日本人がいろいろな出来事を経験し、最終的に東南アジアの風土や深い叡智によって「癒される」という小説の、なんと多いことか。いくら不景気になったとは言え、多くの日本人がその経済的な力で欧米の旧植民地に出かけ、植民地の遺産である豪華なホテルやリゾート地をかつての「白人」のように楽しみはじめている。自分の属する社会では満たされない性欲の発散を求めに行く人も多い。また、好奇心の強い人たちはもっと奥地まで行き、珍しい少数民族の世界をのぞいてくる。それもこれも、以前の宗主国の人たちが植民地で楽しんできたことなのだ。

1980年代以後、日本人が観光地としてタイを訪問するという新たな関係性が定着し、現在に至っている。ジョン・アーリは『観光のまなざし』<sup>40</sup>において、東南アジアの国々が「観光のまなざしの対象としての魅力、とりわけ北米、西欧そして増えつつある日本からの客にとっての魅力を開発する」と指摘しているが、このような状況は日本タイの関係性において、屈折した新たな結びつきをもたらした。日本側から見た観光地タイは、オリエンタリズムとの結びつきの中で、理想の楽園として描かれる。そこに超自然的な力を持った不思議なタイ人が登場し、経済的に恵まれた生活を送りつつもその生活に疲弊した日本人を助けるという構図は、小説・映画などの複数のメディアを通して反復・消費され続けている<sup>41</sup>。言い換えれば観光客が求める安楽や安らぎ以上の、破綻した人生の再構築という願望・欲望が反映されているが、そこにあるのは描かれる側の姿ではなく、見る側の欲望の鏡像である。これらの定型化された表象は、いわゆる純文学／エンターテインメント小説といった、かつて存在していた文学的カテゴリーに関わりなく展開されている。しかしこのような描き方を「誤解」として退けるだけではなく、にもかかわらず、なぜ再生産され、消費され続けているかというイメージ生成のプロセスそのものをたどる必要がある。

このようなタイ表象を支える起源にある問題は何か。

1990年代以後の日タイ関係を分析した赤木攻の「『天使の都』に浮遊する日本人一日タイ関係と日本人社会の変容」<sup>42</sup>では、1990年代のバブル経済崩壊後、タイに「浮遊する日本人＝国際浮遊者」について報告している。タイに滞在する「一九九〇年代から目立ち始めた非駐在員、非企業人、非自営業者といった類の経済活動に直接従事していない日本人」の姿は、日本社会の反映であり、「景気の低迷、無目的と同居する若者、高齢化社会といった日本社会が抱え込んだ社会問題が、そのまま持ち込まれている。」という。このような問題を抱えた日本にとって、タイは「避難場所」「癒しの場」<sup>43</sup>となるが、そこにはひたすら自己の救済を希求する欲望が露呈することになる。アジア・太平洋戦争の〈記憶〉を内包したテキストが、アメリカとの関係性を背景に置いていたのに対し、そのような対立の構図すら作られない。ツーリズムは、〈記憶〉の層の重みを持たず、歴史を欠いた快樂の場所として演出されることになる。赤木が指摘したように1990年代前後から、日系企業の駐在員、観光客というカテゴリーに入らない長期滞在者が増加し、日本社会の問題を抱えたまま在タイ日本人が増加するという社会的状況は、文学テキストにも反映されている。

宮本輝『愉楽の園』（『文藝春秋』1986.5～1988.3、単行本・文藝春秋、1989.3）に登場する藤倉恵子はタイ人政治家サンスーン・イアムサマーツの愛人であるが、タイ語を使用せず、富裕な彼の庇護下にある。彼女はタイに生活しながら、オリエンタル・ホテル、ジム・トンブソン、水上マーケットなどを移動する観光客のような生活を送っている。バブル経済期に発表された『愉楽の園』は、「官能の巢」タイで「虚無と愉悅」を抱えてツーリズムの象徴のように消費するだけの生活を送る日本人女性が描かれている。

卑屈や寛容や当惑や、それ以外の意味不明の感情を演じ分ける目が、到底自分のかなわない相手であることを恵子はいやというほど思い知らされていた。そしてその目こそ、タイという国それ自体であるようにさえ思えるのである<sup>44</sup>。

タイ人男性と日本人女性のカップルは、通常のコロニアルな関係性を逆転させているように見えるが、イサムアーツ側の一方的な片思いにより、恵子の側に選択権と優位性が賦与された不均衡な関係である。最終的に恵子は日本における過去の傷を克服し、新しい日本人の恋人（野口謙）を追って帰国する。

このような日タイ間の恋愛関係を描いたテキストの起源として、例えば岩崎榮『萬歳』<sup>チカイヨウ</sup>（泉書房、1944.5）が挙げられる。またトムヤンティ『メナムの残照』（大同生命国際文化基金、1987.12）では、日本人男性コボリとタイ人女性アンスマリンとの恋愛が描かれているが、数度映画化もされ、タイではよく知られている。このようなアジア・太平洋戦争を背景とした異文化間恋愛を描いたテキストを配置してみたとき、男女の関係性と帝国主義下の国家間との関係が影響し合っている。それに対してバブル経済期に発表された『愉楽の園』では、日本人はサービスを楽しむ消費者として主体化され、タイは癒やしや非日常を提供する場所としてとらえられている。しかし他者に鏡のように自己を投影するという一連のサイクルは、日本文学における表象の中に戦前・戦後を通じて継続して見られる心性であり、現在も再生産され続けている。ここで昭和10年代におけるタイをめぐるイメージがなぜ意匠を変えて戦後になって再び登場したのかという問題が生じてくる。

#### 四. 新たな関係性の模索

池澤夏樹の『タマリンドの木』（「文学界」1991.1~2、単行本・文藝春秋、1991.9）には、タイ国境のカンボジア難民キャンプで働く日本人女性櫻村修子が登場する。彼女は一時的旅行者ではなく、日本での生活を捨て、タイは「自分にとって一番居心地のいい」日常を生きる場所として選択されている。

また別の国、別の文化、別の社会だと彼は思った。人は国ごとにまるで違うやりかたで社会を作る。地域から地域へ移動する者はそのたびに行った先の新しい規則を少しずつ身につけて、いろいろ小さな失敗を重ねながら順応してゆく。

異文化を受容するという心の構えは、目の前にあるタイの姿を見ようとする姿勢につながっている。修子を追ってタイに来た野山隆志は、タイの建物に「植民地風」な意匠を思い描いていたが、そのイメージが裏切られていく。

彼はなんとなく白いペンキ塗りの木造二階建て、窓を大きく開けて風を入れるような植民地風の建物を想像していたが、目の前にそびえているのは鉄筋コンクリートの八階か九階建て、日本のどの病院にも劣らない立派なものだった。

『タマリンドの木』において、テキストの冒頭はアランプラヤートのキャンプに避難してきたカンボジア人の母親の視点から描かれている。「その国は世界のこの一角では最も豊かだという話」であり、修子について、「人を助けて楽しそうな顔をしていられる人（略）頭と心を子供の背丈にして遊んだり教えたりすることができる。あの人はいい人だ。」と考える。しかしこのようなカンボジア人の母親の好意的な見方が理想化されたものであることは、アランプラヤートの難民キャンプに群がるボランティア志望の日本人を痛烈に批判した『バンコク楽宮ホテル』からも推察できる。

さらに池澤夏樹の『花を運ぶ妹』（文藝春秋、2004.4）においては、西欧とアジアの文化の狭間で苦悩する画家の苦悩を通して、「見られることなく見るだけの人間でありたいというおまえの勝手な願いはあっさりと乗り超えられた。おまえは見られてもいる。」というように、旅行者もまた見られる存在であるという意識が描かれている。池澤のテキストは、アジアの側からの見返すまなざしに自覚的な日本人の姿が捉えられている。それはタイを訪れる日本人が多様化し、さまざまなかたちの旅や滞在を重ねる中で獲得されていった認識のひとつと言える。

そしてこれまで言及した小説テキストは、日本人がタイを訪れる物語が主流であったが、1990年代以後、タイ人が日本を訪れる設定が登場する。いくつかの小説を概観しながら、タイ表象の変遷をたどってみたい。

水上勉の『花畑』（「群像」1993.3～1994.5、講談社刊、2005.2）には、日本

の地方都市で水商売をするタイ人女性たちが登場する。旧満州への従軍経験のある76歳の老左官職人小寺源吉は、「いつか私もあじわった異国での体験ではないか」と彼女たちの境遇に共感を示し、「まるで難民船のような移民団ばかりが乗ったはるびん丸で、神戸から門司をぬけ、大連について、当時は満州奉天とよんだ市街にあった運送会社で、苦力とよばれた中国人労働者と一しょに、働いた。」という記憶を掘り起こす。

しかし「私の場合は、当時関東軍とよばれた軍閥の手先がいて、私たちが働きやすいようにしてくれていたから暢気に働けたけれど、タイ女性の場合は、むしろ、パスポートを頼んだ仲介業者とこの町へ斡旋した日本人と、店の経営者のきびしい眼があるだけで、軍隊の守護はむろんこの国にはない。」と源吉は述懐する。アジア・太平洋戦争と現在の状況を接合させる意識が働いているが、そこにあるのは戦争と、経済的格差という背景となる国家間の問題の違いを看過して、「アジア」として自他を一括りにする意識である。源吉を突き動かすのは、「昭和十九年。奉天北市場柳屯とよばれた遊興街もこんなふうな看板がぎっしりだった。」という過去への郷愁と現在の日本での取り残されたような生活への違和感である。タイ人女性たちと言葉が通じなくても、「何でも邪魔くさく思わんで、手まね足まねってやつですよ。やっぱりコメ喰って貧乏してきた仲間だしね。通じることは通じるんですよ、センセよ」と言う。「めし喰うくにの女しょ」という源吉の言葉は、ある意味でタイ人女性への連帯感を表明しているのだが、そこには被害者としての自己規定があるのみで、タイ人女性と自分との差異を消去してしまい、歴史的意識は欠落している。さらに源吉は「九州の炭鉱町」での記憶を想起する。

なんのことはない、五十年経っていても、日本の国はちっともかわってないねえべ。働いでる娘さんこそタイ娘にかわっただけのことでさ、女たちを売り買いする口入屋は、ちゃんとおるんだわな。ちっともかわらねえ。それが癪にさわってよ、おら自分が稼いだ金をタイ娘に使ったまでだべや。ほかにゃ、なーんの思惑もねえんだ<sup>45</sup>

源吉の述懐の背景には、1979年頃からの戦前の「からゆきさん」に相応する、1979年頃からの「タイからの「じゃばゆきさん」の最近の急増」<sup>46</sup>という事態が背景にあった。そして『花畑』が刊行された1990年代には、冒頭で述べたような戦争をめぐる〈記憶〉の再編という問題が背景にあった。

また篠田真由美のミステリー小説『綺羅の枢 建築探偵桜井京介の事件簿』（講談社ノベルス、2002.8）は、「アメリカに負けたばかりの日本人が、ここでまたアメリカ人の猿真似をすると見られるのも耐えがたい。」と考える人物が登場し、アメリカの影の下にある歴史認識を語ってみせる。

日本もまた植民地を所有するために、自分たちはアジアの先進国、アジアの中の白人であり、遅れたアジアの友を啓蒙するのが務めだとこれを読み替えた。だがそれが欺瞞でしかないことを、日本人は知っていたはずだ。なぜならいうまでもなく、日本人の血も日本の文化もアジアのものだからだ。差異の乏しいところに敢えて差異をもうけようとするなら、それは人工的な強圧に頼る他ない。日本を高めアジアを低くする。日本国を神聖化してアジアを蔑視する<sup>47</sup>。

日本に向けられた批判的なまなざしは、批判する自分自身がどこに立っているのかという問題を逆照射する。このようなアジアを介在した自己批判を行うとき、過去の〈記憶〉の前で立ち尽くすしかない。そのようなとまどいをいったん棚上げにした中で展開されるのが、グローバリズムの意匠を借りた視点である。過去の出来事を解消し、アジアと一体化する方向性で〈記憶〉を再編するという手法において、水上勉の『花畑』と意外な共通点を持っているのが、2000年代に登場する小林紀晴の『盤谷』（『遠い国』所収、新潮社、2002.12）である。バンコクのチャイナタウンの中にあるインド人街を訪れ、そこに中国系の女性が働いているのを見る。「世界は多彩で、多様で、あまりに複雑」であり、自分の「知らない感情や思いや意思」が多様な言語で表現されている多言語・多文化状況が描かれている。ここでも「漂うように旅をし、僕は僕自身から色々なものがそぎ落とされていけばいいと思った。自分自身を日本の社会

という呪縛から解き放したかったのだ。」<sup>48</sup> という思いは、かつてのバックパッカーと同様な日本社会の脱落者の感慨と重なっている。それだけではなく、グローバルイズムの意匠を借りてはいるが、現代の日本の現実になじむことができず、歴史的〈記憶〉を捨象して、日本とアジアを接合させようとする点で老職人源吉の述懐とも呼応している。

一方で小林の「トムヤムクン」(『群像』2004.4)では、丸の内線の中で会話する中近東と南米から来た男女が日本語という「共通の言語」で会話をするの聞き、ニューヨークのチャイナタウンのタイの食料店ではタイ人が記す英語のつづりを初めて目にし、「どうして日本人がタイ料理を作るの」と韓国人にたずねられる。国際的な移動が普通の出来事として描かれ、日-タイという単線的な関係が成立せず、複数の民族・言語が交錯する場所になっている。このような場所においては、異民族に対する一方的な排除や囲い込み、表象と主体化という単線的な構図が成立せず、それぞれが〈記憶〉を背負った錯綜した関係性の場所となる。そのような場所がテキストとして表れたとき、二項対置的な構図を描くことはできなくなってくる。そして近年、日本がタイを表象=代行するだけでなく、タイの側が日本を見るまなざしを通して、日本的表象を消費するという現象が見られる。

## 五. おわりに—複数化された視点の導入

吉岡忍のルポルタージュ『日本人ごっこ』(文藝春秋、1989.12)には、日本人になりすまして周囲に信じさせるタイ人の少女が登場する。そのような行為の背景にあったのは、「日本が経済的に進んだ国だっていうことは、みんな知っている。」という経済問題であった。タイの側から見れば、豊かな国という点においてある種の憧れの対象になり得るが、しかしその実態が知られていないからこそ、少女の無邪気な嘘が信じられたという事情があった。1960年代半ば以後、日本経済におけるタイの重要性はベトナム戦争を通して高まった<sup>49</sup>。そしてタイにおける日本文化受容については、かつてのような国家主義的なも



の浸透というより、伝統文化といった概念が周縁化する領域が、タイ国内において再生産されている。例えば日本のマンガ・アニメ等について、ウォーラウト・ウォーラウィッタヤーンは、戦争時に駐留していた日本の軍人によりマンガが持ち込まれたが、現代のタイにおける日本のマンガ流行について、「若者文化はビジネスになりやすい」<sup>50</sup>と指摘している。このような日本においてサブ・カルチャーとして分節化されている領域のタイにおける浸透と流布については、改めて考察したい。

先に述べたように、グローバル化された文化状況の中で、日本語以外の表現においても、日本とタイとの関係を描いた小説が登場している。言い換えれば日本—タイという相互関係のまなざしだけではなく、両者の関係が、第三者の視点を通して描かれている。パオロ・バチガルピのSF小説『ねじまき少女』<sup>51</sup>に登場する日本製少女型アンドロイドのエミコは、「新人類は規律を重んじます。秩序を。従順さを。日本人は、“新人類は日本人より日本人だ”という言い方をします」と述べる。日本—タイの関係性は二者関係として閉じられたものではなくてくる。

タイという地域は、日本にとって東アジアの植民地に比べ、政治・経済上関係性が希薄であり、日本から見て隔離した世界であった。これまで見てきたように、それゆえ現実逃避やユートピアの場所となり得た。このような事情はアジア・太平洋戦争期において、日本側からは〈大東亜共栄圏〉に組み込む一方、タイが想像上の領域であり続けることに大きく影響したと言える。したがってタイに関わるイメージ形成は、日本がタイと緊密な経済的関係を持つようになった1960年代以降に特有のものではなく、1940年代から継承されてきたイメージに起源を持つと考えられる。時代によって紡ぎ出された個々のイメージには共通性と差異があるが、アジア太平洋戦争を経た後の時代にも、タイに向けられたまなざしには、戦前において既に構築されていたイメージが継承された。戦後において、再び日本とタイが〈出会い直し〉をしたとき、表象化は継承され、引用が繰り返され増幅されていった。それでは何が再〈記憶〉化され、何

が切断されたのか。その表象をめぐる生成と消長の運動は、個別のテキストの中から立ち上がってくるだろう。

#### 【注】

- ①『創られた伝統』（エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、前川啓治 梶原景昭他訳、紀伊國屋書店、1992.6）
- ②『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』（ベネディクト・アンダーソン、白石さや 白石隆 訳、NTT 出版、1997.5）
- ③ピエール・ノラ『記憶の場—フランス国民意識の文化＝社会史』（第1巻「対立」 岩波書店、2002.11）
- ④成田龍一「第4章 「記憶」としての戦争」（『戦争経験』の戦後史—語られた体験／証言／記憶』所収、岩波書店、2010.2）
- ⑤④に同じ
- ⑥神谷忠孝「方法としての東南アジア・序説」（『蔡』1号、1984.7）
- ⑦⑥に同じ
- ⑧高見順「タイの井池」（『日本経済新聞』1955.3.19）。高見は1955年2～3月、東パキスタン・ダッカのアジア・ベン会議、ビルマのラングーンのアジア知識人会議に出席した。
- ⑨⑧に同じ
- ⑩小林英夫「戦後東アジアにおける日本人団体の活動—引揚げから企業進出まで—」（『東アジア近代史』第10号、2007.3）。また吉岡忍、『日本人ごっこ』（文藝春秋、1989.12）によれば、「戦後日本の家電メーカーのなかで、外国にはじめて駐在員を派遣したのは松下電器」であり、1957年に駐在員事務所を構える本格的派遣は同社が初めてであった。
- ⑪⑩に同じ
- ⑫末廣昭「日本・タイ経済交流史—30年の歩み」（『タイ経済社会の歩みとともに—盤谷日本人商工会議所30年史—』盤谷日本人商工会議所発行、1987.3）
- ⑬他にも「カセート（農業）大学構内で反日クラブ結成を促すビラが一〇〇枚配布されていた旨、一部の新聞は報じた。その内容に曰く、対日貿易は莫大な入超であるばかりでなく日本企業はタイ国の凡ゆる方面に進出してタイの経済を支配している。又、日本人の観光客は多いが、彼等は凡て日本の飛行機に乗り、日本のホテルや料理屋を利用するのみで何らタイに益する処がないと云う。」（『編集後記』『クルンテープ』1971.2）といった日本企業・観光客を批判する記事が見られる。
- ⑭「クルンテープ」（1970.9）には、編集委員会「アンケートから」という記事が掲載され、記事内容の「人気ベストテン」として、「1. 時事解説 2. 日泰歴史 3. 旅行記 4. みである記 5. タイの民話 6. 医事解説 7. たべある記 8. タイ語 9. ずいひつ 10. インタビュー」が挙げられている。また読者の記事内容に関する要望として、「タイ国に関連した記事に限定してほしい、タイ人口の大部分をしめる貧しい人たちの生活実情、アジアにおけるタイの政治、軍事情勢の動向、タイ生活の知恵袋」（男四〇代）「わかりやすい時事解説（日タイ関係）」（女二〇代）「カンボジア紛争、タイとしてどこまで行動しているかを知りたい」（男三〇代）「タイの政治、経済、軍事についてチラス風のザラ紙にて結構、速報を求む」（男三〇代）などの、社会的・政治的解説や時事的状況の分析などを望む声があった。しかし編集側からの見解としては、「当国においては、外国国内を問わず、如何なる団体も政治に関与しないという条件付で設立許可されております。」「会員各位の最大関心事の一つであるタイの政治軍事情勢については取扱いかねる次第です。」とあり、1970年当時、タイ

国内において出版に関する政治的タブーがあったことがわかる。さらに「本誌の編集方針も、従来からタイ日本人、特に駐在員とその家族の生活ガイドに重点を置いております。一般に回転の速い駐在員の現状にあわせたこの方針は効果があると考えます。また情報産業に乏しい当地では、クルンテープ誌もその重要な一翼を担っているのではないかと述べ、読者層が企業の駐在員が中心であったことがわかる。

- ⑮ 高城道子 (タイ農協銀行) 「百日目の電話」(「クルンテープ」1977.5)
- ⑯ 加藤仁「チェンマイの驟雨」(「問題小説」1992.8)
- ⑰ 「読売新聞」連載(『むくどり通信 東南アジア・中近東の旅』筑摩書房、1962、『戦後 白井吉見 評論集』第4巻所収、筑摩書房、1966.3)
- ⑱ 『戦後経済十年史』(通商産業省大臣官房調査課、商工会館出版部、1954.12)
- ⑲⑳に同じ
- ㉑ 清水寥人『小説泰緬鉄道』(毎日新聞社、1968.7)
- ㉒ 開高健『フィッシュ・オン』(「週刊朝日」1970・1・2～7・3『河は眠らない 開高健ノンフィクションI』)所収、文芸春秋、1977・5)
- ㉓㉔に同じ
- ㉕ 曾野綾子「日の下の労苦」(『遙かなる歲月』)所収、毎日新聞社、1977.3、改題して『慈悲海岸』(集英社文庫、1987.9)
- ㉖ 『タイ経済社会の歩みとともに一盤谷日本人商工会議所30年史一』(盤谷日本人商工会議所発行、1987.3)
- ㉗ 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』(吉川弘文館、2002.1)
- ㉘ 「クルンテープ」創刊号(1968.1)に執筆した富田竹二郎(「現代タイの学生気質」、第2号(1968.2)に執筆した鶴田節男(「カネを使いかねた話」)などが、三島の取材に応じた。
- ㉙ 「観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行」(ジョン・アーリ、加太宏邦訳、法政大学出版局、1995.2、John Urry、THE TOURIST GAZE、Leisure and Travel in Contemporary Societies、Sage Publications、1990)
- ㉚ 三島由紀夫『暁の寺』(「新潮」1968.9～1970.4)
- ㉛ 『タイ経済社会の歩みとともに一盤谷日本人商工会議所30年史一』(盤谷日本人商工会議所発行、1987.3)
- ㉜㉝に同じ
- ㉞ キャロル・グラック『歴史で考える』(梅崎透訳、岩波書店、2007.3)
- ㉟ 立松和平『熱帯雨林』(新潮社、1983・7)
- ㊱ 沢木耕太郎『深夜特急 第一便』(新潮社、1986.5)
- ㊲ 「座談会 報道特派員を囲んで 司会 赤木攻・チュラロンコン大学講師」(「クルンテープ」1977.5)
- ㊳ 西野順治郎「昭和五十一年度 定時総会における会長報告」(「クルンテープ」1977.5)
- ㊴ 角田光代『いつも旅のなか』(アクセス・パブリッシング、2005.4)
- ㊵㊶に同じ
- ㊷ 加納朋子「天使の都」(「週間小説」1996.9.27『沙羅は和子の名を呼ぶ』)所収、集英社、1999.10)
- ㊸ 津島佑子「レイプのうわさ話」(『21世紀 文学の創造5 境域の文学』2003.3)
- ㊹㊺に同じ
- ㊻ ナムティップ・メータセートは、「観光のまなざしによって作り上げられた「タイ」」(「立命館文化研究」2010.3)として分析している。
- ㊼ 赤木攻「「天使の都」に浮遊する日本人一日タイ関係と日本人社会の変容一」(「アジア遊学」第57

号、2003.11)

④④に同じ

④官本輝『愉楽の園』（「文藝春秋」1986.5～1988.3、文藝春秋、1989.3）

④水上勉『花畑』（「群像」1993.3～1994.5、講談社、2005.2）

④末廣昭『日本・タイ経済交流史—30年の歩み』『タイ経済社会の歩みとともに—盤谷日本人商工会議所30年史—』（盤谷日本人商工会議所発行、1987.3）

④篠田真由美『綺羅の柩 建築探偵桜井京介の事件簿』（講談社ノベルス、2002.8）

④小林紀晴『バンコクの象』『ハノイの犬、バンコクの象、ガンガーの火』幻冬舎文庫、1999.11、『アジア旅物語』改題、世界文化社、1996.11）

④吉岡忍『日本人ごっこ』（文藝春秋、1989.12）によれば、1960年代半ば以後、タイの重要性はベトナム戦争を通して高まり、1960年代後半、バンコクの繁華街がにぎわうようになった。日本の家電メーカーはアメリカ軍、米軍基地内売店の販売業者に売ることで、「日本のブランドを世界に広める大きなきっかけ」を作ったという証言を記している。

⑤「イケてる」マンガはビジネスになる」（「外交フォーラム」2003.1）

⑤パオロ・パチカルビ、田中一江・金子浩訳『ねじまき少女』下巻（早川文庫、2011・5）

#### \* 討議要旨

海野圭介氏より、【資料 33】津島佑子「レイプのうわさ話」で、日本における実態としての東南アジアとの関係、あるいは表象としての東南アジアとの関係が、欧米のポストコロニアリズムをスライドしたかたちで想定されている点に関して、このように理解すべきか、それとも何か違う形でモデルが組み立てられるのかという質問があった。発表者は、日本とタイとの関係は単線的なものではなく、例えばアメリカ、あるいは他のアジアを植民地化した欧米諸国との関係性が輻輳する中で、こうした眼差しが成立していると応答し、三島由紀夫『暁の寺』で、アジアとして、タイを占有化するオリエンタリズムな眼差しがある一方で、本多繁邦自身がイギリス人の眼差しに射すくめられてしまうことを、輻輳する関係性の事例として挙げた。そして今回は非常に単純化したかたちで全体を眺めているかのような印象を与えてしまったが、日本がアジアでありながら、欧米的な眼差しでタイを見ていくといった屈折があり、実際のテキスト分析では複数の眼差しの交錯・屈折を見ていくことが大切であると強調した。これに対して海野氏より、【資料 21】末廣昭氏の論に「非白人知識人男性の苦悩」とあるように、日本男性だけでなく、白人の眼差しがあり、それらとタイとの三つ巴の関係を見ていくことになるのがよく理解できたとの見解が示された。次に、司会・戸松泉氏より、タイにこだわった理由は『暁の寺』からなのかとの質問があり、発表者は、三島とアメリカ、あるいは西洋との関係がよく指摘されているが、実際に作品舞台とはなっておらず、舞台がアジア地域となっているものがあるので、タイを一つの例（変数）とすることは、既成の作家像を揺るがし、別の視点からの評価を可能にするのではないかと考えていると応答した。